

## 天声人語

漫画の才手の定番は、まる子の計画性のなさが発覚するシーンだ。たとえば夏休み最終日に山積みの宿題を思い出す。動揺するとおでこに黒線が何本も入り、「ガーン」という音が文字で飛び出す▼人気漫画『ちびまる子ちゃん』の生みの親さくらももこさんが亡くなったと聞き、随想を読み直した。『さるのこしかけ』『たいのおかしら』『ひとりずもう』『あのころ』。題名からして軽妙で味わい深い▼バレンタインデーにチョコを贈られてドギマギしたこと。先生の家庭訪問の準備に親が張り切りすぎて困ったこと。紙芝居屋で駄菓子を300円も買ってしまったこと。作品は、高度成長期の子どもなら誰もが身に覚えのありそうな体験をもとに描かれた▼作者の言葉を借りれば、「思い出のフィルターを通して仕上げている」（『もものかんづめ』）。そのフィルターの通し方が秀逸だった。たとえば祖父の友蔵は、実際は気むずかしい人だったようだが、作品では孫をかわいがる好々爺（こうこうや）に。愛すべき人物に育っている▼時代の描き方にも独特のさえがあった。故・西城秀樹さんの熱唱や、世紀末に人類は滅びるといふノストラダムスの大予言。さくらさんのフィルターを通すと、当時を知らない若い世代にも時代の空気がよく自然に伝わった▼新聞やテレビにめったに登場しない人だった。53歳という早すぎる訃報（はらうほう）に接して、ふいに頭に浮かんだのは作家ではなく、「まるちゃん」のあの笑顔の方だった。喪失感の深さに驚く。